

時々、実に珍しい書きものを頼まれるが、聖書のマタイ伝の一節を横書きにしてほしいというので、厚い書物を開いた形の石に刻む大きい碑稿を書いた。

これはたしか多磨墓地の誰か著名な方のお墓になるもののようにであった。この時フト思いついたのであるが、これが英語とかフランス語などであれば、最初の頭文字はかなり工夫をこらした装飾性のあるものを使うのだが、漢字や仮名にはそんな慣例もない。いかにも東洋的でヨーロッパに負けない装飾的文字を使つてみたいと、貧しい頭をひねつたが、まあそのままになってしまった。

ところがその直後（といつても戦前のこと）で昭和十年を少し過ぎたころか）に、米国のエジソン氏を日本電気学会と日本機械学会から各々別々にその名誉会員に推戴する推戴状を書いてくれと頼まれ、金の飾り枠の中にその学会の紋章を大きく中央に入れた大学の卒業証書くらいな紙を持ちこまれた。ついで半年も経たないうちに、今度はイタリヤのマルコーニ侯爵にやはり前記の二学会から同文の推戴状を贈るといので、これも引き受けた。

こういうものを欧米ではどんな風を書くのかわからないので、外国留学者に聞いてみた。大抵その発明家なんかの記念館のような所に飾つてあり、随分立派な額縁に入れられているが、文字の方はあまり気づかなかつた、という。気づかないところを見ると、大して装飾した字で書いていないんじゃないかな——ともいわれる。

しかし、これとは全く違うものだが、アフガニスタンから西のイسلام教圏の博物館で見かけるコーランなどに、ミニアチュアの美しい細密絵を入れ、頭文字だけは色の違うインクを使つてのや二重に隈どつたもの、絵と字と判然としないくらいなものもあつて見惚れたこともある。

頼まれもしないのに、漢字や仮名をそんな風には書けないから、東洋的で莊重なもの例はないかと考えてみるがどうも見当らない。が、東洋的なもので冒頭に文字を飾るとなると、碑文がある。

たとえば碑の本文とは関係ないかの形で、上に題額と称する枠を作り、本文とは全く異なる篆書とか隸書といったものや、唐の時代などには「飛白」と呼ばれるカスレだけで作つた字、しかもその飛白文字の第一筆は鳥の頭になっているものもある。

これは書かれる碑文とは関係なくそんな書風の字で題字はその詞まで、不即不離なものを選んでいるのさえある。

日本の弘法大師が中国へ留学した時にこれを学んで帰り、益田池碑や宗祖の像の題字などに使っているが、当時としては中国でも日本でも随分思い切つた新しいものだったのに相違ない。ハイカラな坊さんだつたことはたしかである。

この冒頭の字は何か美しい。そして飾つた文字にしたいという希望は、仏教の方では梵字、または「種字」といつて一字で仏や菩薩を象徴する文字にあらわれる。本文の内容と密接な関係のあるものを、頭初に大きく記して書いている例が、やはり弘法大師のご宗旨に関係のあるものに多く見られるが、あるいはこれはこの宗門の大事な作法で、私どもが外から覗いて装飾性のためになどと申しては勿体ない妄言なのかもしれない。

とにかく、かつて仏教が中国より先に流行していたシルクロードの各国は、今ほとんどイスラム教圏に入っている。このイスラム教のモスクは、コーランに見られる文字をリボンの飄るように建物の装飾にまで使つて、なにかたのしい雰囲気を作っている。そして関係のある文献類にもよく応用している。

(つづく)

〔書範〕、昭和五十六年十二月

〔筆間雑記〕 中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。